

横浜市金沢区野島海岸で採集されたマゴコロガイ

木村 喜芳

Kiyoshi Kimura: Record of *Peregrinamor oshimai* from Nojima beach, Yokohama

マゴコロガイ *Peregrinamor oshimai* はアナジャコ類の胸部に着生するカワホトトギス科 *Dreissenidae* の二枚貝である。本種は、庄司 (1938) により福岡県博多湾産の標本に基づいて記載され、模式産地のほかに熊本県と東京湾に分布するとされた。その後、九州から東京湾までのいくつかの内湾の干潟から記録されたが、近年の干潟の減少に伴い、その生息場所が失われつつある (和田ほか, 1996)。庄司 (1938) の原記載以降、東京湾では宮崎 (1941) が金沢八景の海産生物相に関する報文で本種について記述した以外には記録がなく、すでに絶滅したとみなされていた (木村・山本, 1990; 和田ほか, 1996)。筆者は横浜市金沢区野島海岸において本種の標本を得たので報告する。

本報をまとめるにあたり、海をつくる会の荒井雪江氏には標本を御恵与いただいた。姫路市立水族館の増田 修氏からは多数の文献・資料を提供していただいた。標本の登録にあたっては横須賀市自然・人文博物館の林 公義氏に便宜を図っていただいた。ここに記して感謝の意を表する。

マゴコロガイ *Peregrinamor oshimai* Shoji, 1938

YCM-H (横須賀市自然博物館軟体動物資料) 8761: 1 個体 (図 1), 神奈川県横浜市金沢区野島町野島海岸 (東京湾), 1999 年 2 月 6 日, 荒井雪江氏採集, 殻長: 8.9 mm, 殻高: 3.5 mm, 殻幅: 5.5 mm。

採集標本は、体長 38.6 mm のアナジャコ *Upogebia major* の胸部腹面に足糸で付着していた。アナジャコは海岸に打ち上げられたアオサの中に数個体が発見さ

れたが、本種が着生していたのは上記の 1 個体のみであった。

冒頭にも述べたとおり、マゴコロガイは全国的にも産地が限定され、いずれの産地においても絶滅寸前と評価されている。模式産地である博多湾においても、庄司 (1938) が調査した当時には、アナジャコの約 4 割にマゴコロガイの着生が認められたとされるが、現在ではまったく確認されていない (和田ほか, 1996)。今回の野島海岸での採集例により本種の分布東限が東京湾にあることが再確認されたが、その生息状況はきわめて稀少であると考えられる。野島海岸は横浜市沿岸に残された唯一の自然海岸線であり、この周辺水域からは多くの海岸動物が記録されている (海をつくる会, 1995)。今後、野島海岸周辺での本種の詳細な生息状況の確認が必要であるが、あわせて生息水域である干潟環境の保全が望まれる。

文 献

- 木村昭一・山本妙子, 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集。ちりぼたん, 21 (1-2): 12-13.
宮崎一老, 1941. 湘南金澤地方に於ける海産生物相に就て (1). 3 (10): 299-306.
庄司幸八, 1938. 珍しき共棲二枚貝マゴコロ貝。貝類学雑誌 (Venus), 8 (3-4): 119-127.
海をつくる会編, 1995. 横浜・野島の手と生きものたち. 266 pp. 八月書館, 東京.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤 真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本における干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report, 3: 1-182.

(相模湾海洋生物研究会)

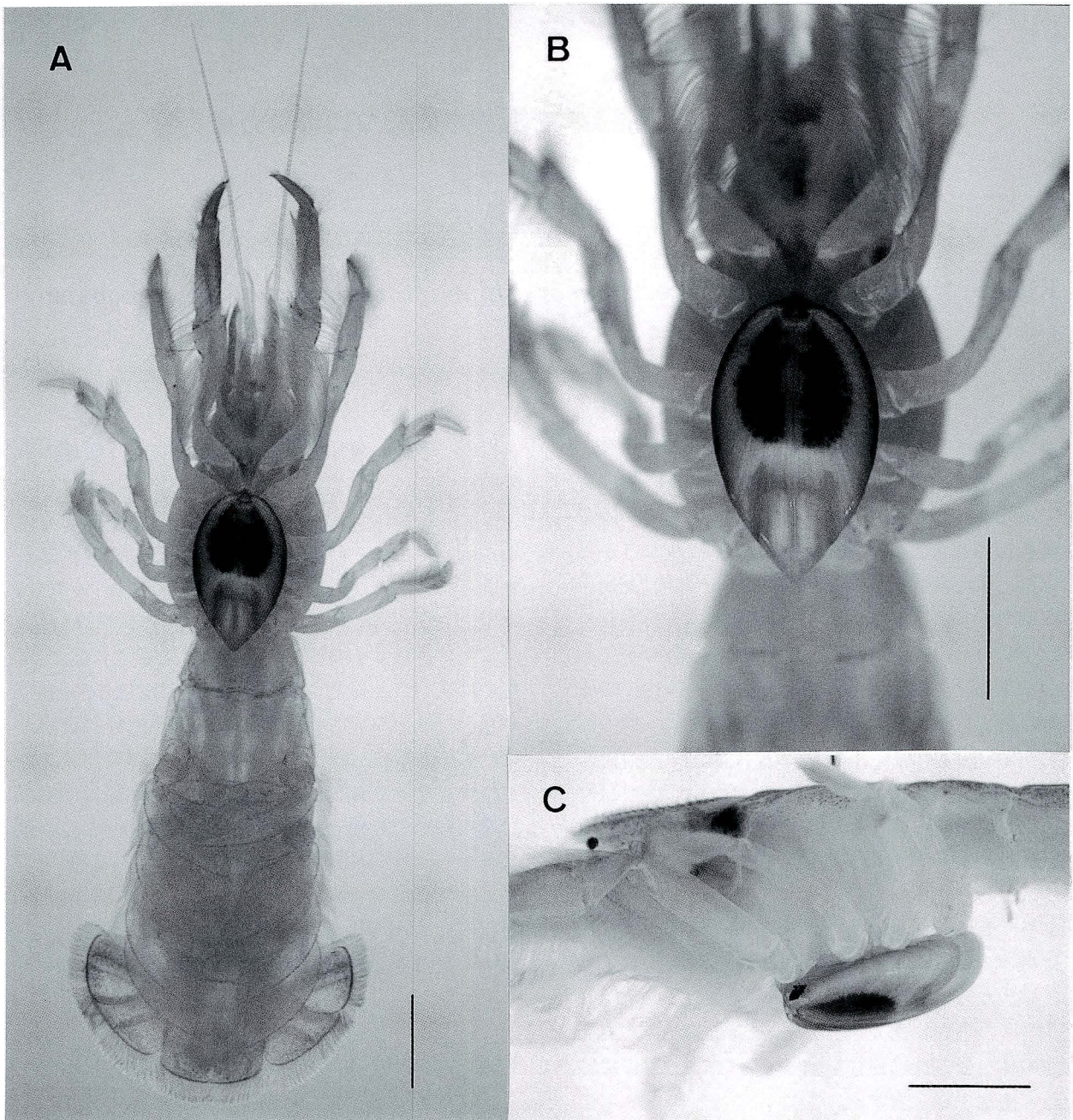


図1. アナジャコの胸部に着生したマゴコロガイ(YCM-H8761, 横浜市金沢区野島海岸産). A, B: アナジャコの腹面から, C: アナジャコの側面から (スケールはいずれも 5mm)